

日本精神科医学会 認定栄養士 更新 事例報告書

例

認定番号	氏名	施設名	事例区分
****	○× △□	医療法人○○会 △△病院	①栄養管理

<目的>

精神疾患を伴った高齢者患者の栄養管理は、必要な栄養量だけでなく、背景にある病状と、その患者の生活環境や延命などを考慮しながら、治療計画を多職種で検討する必要がある。

管理栄養士の役割として、精神症状、生化学等検査によるデータ、薬剤の使用状況、BMIなどの身体状況、咀嚼嚥下機能の評価、栄養補給方法及び適切な食形態など考慮し栄養計画をたて、多職種への情報提供や提案を行い、安全にまた、出来る限り経口摂取での栄養補給を選択し、消化管を利用した栄養補給を考える必要がある。

以上のことから、患者中心の診療計画と倫理的に配慮した栄養管理計画により患者のQOL向上を目的として介入を行った。

<事例呈示>

82歳男性、主病名：アルツハイマー型認知症（中期）

- ・ADL：要介護3、車いす利用
- ・身体状況：下肢静脈血栓症、嚥下障害あり（嚥下調整食分類2021で1j摂取）、褥瘡（仙骨部4cm×2.5cm II度）、脱水傾向
- ・入院時精神状態：せん妄、拒食、徘徊を認める。入院時は落ち着きなく焦燥感あり
- ・治療方針：末梢静脈栄養まで、胃瘻造設及び中心静脈栄養は行わない要望有
- ・生化学検査値：Alb3.7g/dl、総タンパク6.0g/dl、ヘモグロビン11.5g/dl、CRP2.53mg/dl、D-ダイマー5.93μg/ml、入院7日前にBUN45.5mg/dlを呈していたが、20.5mg/dlに改善されている
- ・栄養必要量算出：身長168cm、体重50.0kg、BMI17.7kg/m²、IBW62.1kg、act1.2、stress1.2、TEE1738kcal
- ・入院前は主に78歳の妻が介護を行っていた、デイサービスは利用していない

<介入内容>

入院時スクリーニングでは、医師より誤嚥及び褥瘡があり、看護師からはSGAによる評価で体重減少は少ないが、拒食及び拒薬が認められると情報共有がある。Alb3.7g/dlと比較的高いが脱水が認められ、拒食や嚥下障害があるため、栄養管理計画では高リスクとし1週間後の再評価とした。入院時の嚥下査定は、とろみ水とゼリー一食で栄養士・歯科医師で実施したが、落ち着きがなく口にとろみ水等を入れると発語するなどの行動が見られ検査に集中できずにいた。咽頭部通過時に雑音が認められたため禁食とし、末梢静脈よりアミノ酸輸液電解質液の栄養補給を提案し実施することになった。服薬は禁食のため静脈投与とした。

入院5日後、精神状態安定したため本人・家族の了解を得てVE（嚥下内視鏡）による精査を実施した。その結果、とろみ水及び水での誤嚥は無く、高栄養補給ゼリーでは咽頭残留はやや認められるものの誤嚥は認められないため、少量からゼリー一食の経口摂取を始め、アミノ酸輸液との併用で必要エネルギー量1200kcalタンパク質50gの摂取を目標に開始した。しかし、時折異常行動や徘徊を起こすため、食事中のみまもりを看護に依頼した。褥瘡は車いすを利用しているために仙骨部に発症しているため、高栄養ゼリーと亜鉛・銅・ビタミンが強化されたゼリーを選択し、外用薬とケアで対応することを確認した。

<結果>

入院40日目にソフト食（ミキサー処理し顆粒状ゲル化剤で固めた食事）半量の摂取と高栄養補給ゼリーの摂取が可能となった。入院10日目で脱水が改善されてきたため一時、Alb2.9g/dlまで低下したが、経口より、熱量

事例文字数 1,895字

1200 kcal、タンパク質 46.0 g、脂質 39.0 g、炭水化物 250.0 g の摂取が可能となり Alb3.4 g/dl まで改善されたため月 1 回再評価となった。入院 50 日目には、見た目には変わらず咀嚼が容易な食事へ変更し QOL の向上に向けた食事の提供とした。

<考察>

本事例において、各職種により患者中心の介入をおこなうことで、患者 QOL の向上に結び付いたと考える。

高齢者の場合はとくに、低栄養に陥ると筋力の低下や骨折、感染症のリスクが高まり、栄養補給を行っても回復に時間がかかってしまう。そのため胃瘻造設や中心静脈栄養など選択肢として考えられるが、個々の環境が異なるため、入院時に本人・家族と治療方針を確認しておくことが重要である。また、退院後は自宅療養になるため、認知症によるうつ状態になると再度拒食などの影響が予測されるので、患者 QOL の維持のため家族への情報提供だけではなく介護保険の利用も考慮したアプローチも行っていく必要もある。

精神症状による食行動の異常は、さまざまところで現れてくるため、医療者側が患者を中心としたチームで取り組み、その病状を背景に身体管理を行えるスキルを身に付けることが肝要であると考えられる。